

## プロジェクト名

### ：徐霞客遊記研究—伝記研究・遊記文学史における位置づけを中心に

代表者：薄井俊二（教育学部・教授）

分担者：飯泉健司（教育学部・准教授） 同 大橋修一（教育学部・教授）

同 小林聡（教育学部・教授） 同 田村均（教育学部・教授）

## 1 研究の目的と進め方

- ・本研究は、中国明代に記された「徐霞客遊記」について、文献学的検討や訳注作り等の基礎的研究を施し、更にこの資料の持つ、思想史的位置づけについて明らかにしようというものである。
- ・上記の大きな目的を達成する一歩として、2012年度は、①基礎的研究については、「徐霞客の伝記研究」、②遊記の訳注については「嵩山日記」「浙遊日記」と「江右遊日記」の一部、③思想史的研究については「遊記文学史における位置づけ」と「洞窟観察」を取り上げることとした。
- ・伝記研究や訳注作りを行う「基礎研究部門」、「文学史部門」、「地理学・地理思想史部門」の三部門に分かれて研究を進めた。

## 2 研究内容

- ・「基礎研究部門」では、徐霞客の伝記研究を行ったが、文献資料の蒐集・検討とあわせて、彼の故居を訪ねての実地調査を行った<sup>(1)</sup>。
- ・訳注作りは、名山遊記のうち「嵩山日記」<sup>(2)</sup>、及び西南遊記のうち「浙遊日記」を訳出した<sup>(3)</sup>。
- ・訳注作りとして、西南遊記の「江右遊日記」に着手したが、それに資するために、福建省及び江西省に赴いて、実地調査を行った<sup>(4)</sup>。その成果は近日中に公刊の予定である。
- ・「地理学・地理思想部門」では、「浙遊日記」の解読から明らかになった、徐霞客の洞窟への理解度を検討した。その成果の一部は後述する。
- ・「文学史部門」では徐霞客遊記の、中国遊記文学史上の位置づけを追求した。嵩山日記などの山岳遊記に着目して検討したが、リアルな登攀活動の描写や山岳に対する宗教的な視点の希薄さなど、それまでの遊記文学とは性格を異にするものであることが、明らかになりつつある。さらなる検討が課題である。

## 3 研究成果—徐霞客の洞窟観察について

洞窟は、中国文化において特別の「場所」とされており、とりわけ道教においては、「洞天」として「神仙＝永生者たちが棲む別天地」という位置を与えられていた<sup>(5)</sup>。多くの洞窟が探索され、描写されてきたが、そのほとんどが思想的もしくは審美的な視点からのものであった。その中で、洞窟を自然物として客観的な立場から観察し、描写したものとして、「徐霞客遊記」は先駆的である。その先駆性は中国のみならず、世界全体を眺めても、これほど詳細に洞窟を観察し研究したものはそれ以前にはなかった<sup>(6)</sup>。

その徐霞客の洞窟観察であるが、従来は、カルスト地形による石灰岩洞窟（鍾乳洞）を取り上げる研究が主であった<sup>(7)</sup>。しかし「江右遊日記」を見ると、石灰岩洞窟の他に、近年注目されている丹霞地貌<sup>(8)</sup>に関わる洞窟の描写が見られることが明らかになった。以下徐霞客遊記から、この二種類の洞窟に関わる描写を取り上げて紹介する<sup>(9)</sup>。

**1) 石灰岩洞窟（鍾乳洞）の描写** 崇禎9年（1936）10月4日 浙江省洞山（「浙遊日記」）

a 「その屏風の南が明洞である。樓閣の軒がそこで開いているかのようで、外には五本の脊柱が突き立っている。……その中の一本は、上に伸びているが軒の底には至っておらず、底からも石が垂れているが下の柱までは至っていない。上下にあい対していて、その隙間は二十センチメートル以下しかない。」

→石灰岩洞窟の典型である、「石柱」を描写するが、「つらら石」と「石筍」とが接近してきて、「石柱」に至ろうとしている段階を描いているものと思われる。

b 「南は水を湛えた洞がある。水はひとめぐりすると、すぐに仙人の水田をなし、畦が何層にも整っている。水が水田に満ち満ちており、外に漏れ出ることもなく、かつ干上がることもない。人は畦を踏んで曲がりながら洞に入る。およそ二十丈進むと、忽然として滔々とした水音が聞こえる。」

→「仙人の水田」とは、リムストーン（畦石）でしきられたリムプールが、階段状をなしている様を描いたものではないか<sup>(10)</sup>。

**2) 丹霞地貌洞窟の描写** 同10月26日 江西省馬祖巖（「江右遊日記」）

c 「馬祖巖は左の崖の半ばに位置していた。すなわち新巖の背面に当たる。そこに横様に裂けた洞窟は、ちょうど新巖にあったそれと同じである。しかしその洞窟のあたりには僧侶たちが二手に分かれて居所を定めていた。そして洞窟には犬・豚・牛・馬をいれた囲いがいっぱいである。」

d 「（cとは別の）巖の外側の崖とそれに向かい合う崖とは、双方とも下の方には百仞も深さの谷をなし、上の方には千尺の高さで天を刺す。それでいてその間隔は一尺程しかない。そして中間は横に裂ける洞窟が、重なる樓閣のように深遠に横たわる。」

→横様に裂ける洞窟は、丹霞地貌に特有のもの。褶曲作用により層をなした岩が、その層に沿って浸食されるため、水平や斜めに細長く浅い洞窟が形成される。それが、dのように幾重もの層をなすことも多い。福建省武夷山と江西省龍虎山には、洞窟を利用した紀元前の墳墓が確認されているが、cによれば、そこで家畜を飼ったり人が住んだりもしていたようである。

（1）2013年2月20日から21日：江蘇省江陰県。（薄井が担当）故郷の馬鎮には、徐家の家屋が庭園ともども復元され、博物館となっている。

（2）薄井俊二「徐霞客遊記訳注稿——名山遊記篇（二）『嵩山日記』」『埼玉大学国語教育論叢』15号。

（3）薄井俊二「徐霞客遊記訳注稿 西南遊記篇（一）『浙遊日記』（前半）」『埼玉大学紀要』（教育学部）61巻2号、同「徐霞客遊記訳注稿 西南遊記篇（二）『浙遊日記』（後半）」『埼玉大学紀要』（教育学部）62巻1号。

（4）2012年11月21日から26日：福建省武夷山・江西省龍虎山。2013年2月18日から20日：江西省武功山。（薄井が担当）

（5）三浦國雄「洞天福地小論」『東方宗教』61号（1983年）。

（6）エリック・ジッリ『洞窟探検入門』白水社・文庫クセジュ（2003年）

（7）例えば、任美鏐「徐霞客対世界岩溶学的貢献」『徐霞客研究文集』江蘇教育出版社（1986年）等。

（8）赤い堆積岩が隆起した地形。主として赤みがかった砂岩や礫岩によって形成される。丹霞山という固有名詞から転じて、その山の地貌と同じものを丹霞地貌というようになった。形はカルスト地形に似ているが、岩質が異なるので岩肌の色が異なり、洞窟も鍾乳洞のような巨大なものは形成されない。

（9）引用は、拙稿の口語訳による。

（10）沢勲他『洞窟科学入門』大阪経済大学出版社（2006年）によれば、「洞床の緩い流れに水たまりが出来ると、水たまりの周囲に炭酸カルシウムが沈着して畦を作る。この畦をリムストーンと言い、畦で出来た水たまりをリムストーンプールと呼ぶ。」